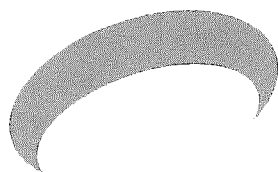


ザンビアの民主化と農村開発



高田 浩 幸

1 日本人への期待

雨季を間近に控えた南半球の暑乾季、ケニア製のテントには村で調査の手伝いをしてもらっているハチタがいた。夕食後の一時、私と彼は中国製石油ランプの弱々しい灯の下で、調査のことなどを話していた。その日は珍しく議論が進み、貧富の格差の問題に話が及んだ。彼は初め、私が村に来て会社を設立しそこで貧しい村人たちを雇うものと思っていたらしい。しかし私はその場ですぐ、目に見える形で彼らに何かをもたらすような人間ではなかった。むしろあなたたち自身による努力の方がより一層重要である、と私はハチタに言った。それに答えて彼は、現在の一党制では一部の人々ばかりが得をして、われわれ貧農は何をやっても無駄である、と言う。ならばどうしてそうした体制を変えようとししないのか、と私は突っ込む。農民の多くは貧しく読み書きもままならないし、社会運動をする知恵もなく、家族のことばかり考えて、社会的に団結することはない、と彼は悲観的に答える。さらに、日本人は何をしてくれるのか、と尋ねる。最終的には自分たちの努力が必要だ、と私は繰り返す。しかし絶対的貧しさはどう

しようもない、と彼は言う。もったもである。

国際的な経済格差を考える時、私は日本人としてあまりにも自己中心的であったことを反省する。私は日本的感覚で、彼らは自ら努力するべきだと考えていた。しかしこの格差を彼らの目から眺めた時、彼らのとる態度も否定できなくなる。格差はあまりにも大きすぎる。先進国に追い付き対等に渡り合うことが可能だと思うことは絶望的である。追い付くことが不可能ならば、何か他の道を探らなければならない。そしてその道の実現に何が求められ何が障害になっているのかを見極めることが重要なのだ。

2 村の選挙

1990年4月30日、その日は全国一斉のウォード・チェアマンの選挙投票日だった。これは日本の市町村長ぐらいにあたる人である。しかしザンビアはこれと別に、チーフやヘッドマンという政治的責任者が地域ごとにいる。ウォード・チェアマンは中央政府から予算を受け地域行政を行なうのに対し、チーフやヘッドマンは慣習法に基づく行政・司法、双方の役割を担っているといえる。具体的には土地所有権の管理やさまざまなトラブルの調

停などがある。司法に関しては成文法に基づくシステムも整備され、県には裁判所があり近代的な裁判が行なわれている。チーフには中央政府あるいは地方政府からの予算交付はないが、その地位に対する特別手当が支給されていた。チーフやヘッドマンは強制力を伴う行政権限を有していない。彼らの地位は、村の長老や彼らの親族の話し合いによって決定される。だからチーフやヘッドマンは伝統的な地域の責任者といえるだろう。一方ウォード・チェアマンは近代西欧的な国家体制をモデルに、地域ごとに置かれた国家行政の末端の責任者といえる。つまりザンビアは伝統的な政治システムの上に、近代西欧的な政治システムを敷いていると言えるだろう。そこには当然さまざまな矛盾や弊害が存在するに違いない。だがザンビアは敢えてそれを採用した。あるいはそれを採用せざるを得なかったのかもしれない。ザンビアは独立してまだ四半世紀を少し超えたところである。その国家体制に評価を下すのは早すぎるだろう。

さて投票は朝の6時から夕方6時まで行なわれた。私の住んでいたチェーロ村からも選挙権を持つ人々が投票所へ出かけた。歩いて小1時間、シヨイという村にある小学校がその地区の投票所である。投票は誰でもできるというわけではない。まずUNIP（統一民族独立党）という政党（当時ザンビアはまだ一党制であった）の党員でなければならない。次に、党員カードを持参しなければならない。次に住民カードが必要である。これは身分証明書のようなもので、成人は全員が持っていてこのカードには指紋が押捺されている。さらに選挙事務所から発行された投票カードが必要である。最後に受付で少額の手数料を支払わなければならない。こうした条件を満たして初めて投票ができるのである。手数料の支払いが済むと受付で投票者名簿による照会が行なわれる。次に投票を済ませた証拠

として指にインクが付けられる。投票用紙を受け取り、記入の説明を受け、いよいよ候補者の選択である。記入はカーテンで仕切られた場所で行なわれ無記名なので、選挙の原則である秘密主義は守られているようであった。投票用紙には立候補者の個人名は記載されていない。その代わりに動物や農耕具の絵がならんでいる。記入所にはその拡大コピーが貼り付けられ、それらの絵の横に立候補者の名が並んでいる。この地区からは二人の候補者が立ち、一方は長靴、他方は斧をシンボルマークとしていた。それらのシンボルには意味が込められている。長靴も斧もともに生活に欠かせない物である。だから各候補者は人々にとって不可欠であるとアピールしているのだ。

選択する候補者の横にバツ印を付けて記入は終わる。最後に投票用紙は人に見られないように二つ折りにされ、鍵の掛かったジュラルミンの投票箱の中に入れられる。

3 変化への胎動

ウォード・チェアマンの選挙結果は投票日から数日後に発表された。再選を狙った「斧」氏を抑えて「長靴」氏が当選した。しかしながら「斧」氏はこれに納得せず、直ぐルサカの最高裁判所に選挙のやり直しを求めて告訴した。その費用、約9000クワチャ。これは平均的労働者の給与の半年分以上であった。そしてその金はたとえ裁判で勝訴しても戻ってこないそうだ。そこまでしてウォード・チェアマンの地位に彼を執着させたものは一体何だったのだろうか。聞くところによると彼は過去2年間の任期の間、政府から支給された毛布や食料を横領して自分の家族や親類だけに配り、村の人々には何も分け与えなかったそうである。そのことが今回の選挙で彼が落選した理由と考え

られていた。つまり彼はたとえ9000クワチャを支払っても、ウォード・チェアマンであることから得られる利益を失いたくなかったのだ。それほどウォード・チェアマンの地位は彼にとって旨味のあるものだったのだろう。けれども結局その告訴は認められず、彼は失意のうちに普通の村人に戻った。

さて新しくウォード・チェアマンになった「長靴」氏だが、この人のことは村の人々にもあまりよく知られていなかった。今回の選挙で当選したのは彼自身の人柄というよりも、「斧」氏に対する反対票によるものだと思われていた。だから彼が前任者のように横領をしないという保証は全くない。アシスタントのハチタはそのことに対し悲観的だった。われわれ「アフリカ人」は自分の家族や親族の利益だけしか考えない、と言う。確かにアンゴラやナイジェリアの選挙後の事態を鑑みる時、それは「アフリカ人」の本性であると思いたくもなる。しかしこのフレーズは自己批判しているようでありながら、実は多くの場合において自己弁明の手段として用いられているように思われる。つまり全てのネガティブなことを「アフリカ人」の本性であるとして片づけようとするご都合主義を生みだしているように考えられる。他方、そうしたご都合主義が厳しく批判されなければならないのはもちろんだが、彼らが自己中心的あるいは自部族中心的であったとしても、それは避けられなかった歴史の産物であり、決して「アフリカ人」の本性として片づけるべき問題でないような気もする。でなければ問題は永遠に解決しないことになるか、あるいは解決の道が一部の勢力による特定の思想の押しつけによる「アフリカ人」の「進歩・発展」に限定されることになるからである。

独立後の部族主義超克政策と交通手段の発展に

伴う人的交流の増大により、ザンビアの伝統的社会システムは変化の波にさらされてきた。しかしその一方で、伝統的なものの考え方はいまだに人々の間に強く生き続けている。このような状況の中で人々は、伝統への安易な回帰でも現状肯定でもない何かを強く求めている。

4 食糧暴動から複数政党制へ

主食のミールミル(トウモロコシを製粉したもの)の値上げを契機に発生した、1990年6月の首都ルサカでのザンビア大学の学生を中心とする抗議行動は、次第に反政府運動といった色調を強めていった。

同月26日午後3時過ぎ、ザンビア大学で学生がタクシーを焼き打ちした。機動隊が学生へ向けて発砲。胸を撃たれたらしい男が白いTシャツを真赤な鮮血で染めて肩を支えられながら大学の方へ逃げ込んだ。大学内で待機していた救急車がその負傷者を収容しようとしているところへ機動隊が発砲した。学生は車に投石を続けていた。白人やインド人の車は自警団の護衛を付けて大学の前を通過していった。護衛の車にはライフルや散弾銃を持った男たちが荷台から周りを威嚇していた。

BBCのラジオニュースは、20名あまりが死亡し560人以上が逮捕されたと伝えていた。

1990年6月の流血事件を経て結成が可能となった野党勢力MMD(複数政党制民主主義運動)の全国遊説は同年9月には始まっていた。私がいた県でも9月2日にその遊説が行なわれた。10時半の開始前からすでに多数の人々が集まっていた。警察が出て警備にあたっていたがきわめて友好的だった。主催者側の席には白人の神父の姿もあった。「一党制反対、複数政党制賛成」というスローガンが

現地語で繰り返されていた。県内の主だったチーフも出席しMMD支持を表明した。聴衆の中にはインド人もいたが、白人の姿は見受けられなかった。一方、時期を前後して行なわれた与党UNIPの集会は、役人への動員がかかりルンバのバンドの余興があったにもかかわらず、閑散としたものであった。

10月に入り首都を離れ村に身を置いていたある日、アシスタントのハチタが手に青いカードのようなものを持って尋ねてきた。開口一番、“THE HOUR HAS COME”ときた。これは野党MMDのスローガンである。街では大統領および議会の総選挙を控えこのスローガンを毎日のように耳にしていたが、村でそれも身近な人間からこの言葉を聞いたのは初めてだったので驚いた。それに彼は与党であるUNIPのメンバーだったと記憶していたので事情を聞いてみた。彼曰く、「教会の決定だからね」。シニカルな薄笑いが浮かんでいた。彼はチエーロ村一帯で有力なSDAというキリスト教の一宗派の地区教会の責任者の一人であった。その教会が今回の選挙に向けてMMD支持を暗暗裡に打ち出した。政治より信仰に重きを置く彼としては、UNIPから非難されるよりも教会を追われることを恐れたのでMMDの青いカードを持って党员拡張のために村を奔走している、というのが真相のようであった。

5 農村開発へ向けて

足掛け4年にわたって付き合ったザンビア・チエーロ村の農民たち。その間、政権の交替や数十年来の旱魃などがあった。しかしそうした出来事にも関わらず彼らの生活体系の変化は微々たるものであった。村の生業は相変わらず自給のための穀物等の耕作と現金収入のための棉花などの換金作物の栽培を中心に動いていた。だが一方で生活

水準の低下は誰の目にも明らかであった。旱魃による食料自給の困難と現金収入の激減。激しいインフレによる家計の圧迫。役畜であると同時に財産でもある牛の流行病による喪失。それらはチーフやヘッドマンといった伝統的政治システムでは解決できない問題であった。行政による何らかの対応を農民たちは強く期待していた。それは政権がUNIPからMMDへ変わっても基本的に変化しない農民たちの態度であった。そうした受身な姿勢とは逆に、長く続いた一党制に伴う腐敗への不満は、政治に対する農民の関心を高めることとなった。

政治への関心の高まりは「長靴」氏の当選、チルバ新政権の誕生へとつながったわけだが、それを農民の政治意識の変革と見なすことは早計であろう。ましてそれを民主化と言うことは、農村での伝統的政治システムがまだ生き続けていることを考える時、買い被りを越えて誤解でさえある。確かに政治は変わった。だがそれは農民の政治意識の変化によるというよりも、生活水準の悪化に抗して、耐乏よりも「変化」を望んだ農民の選択の結果であったと理解するのが妥当であろう。

個人が社会の中でアトムとして存在し自立的に社会に関わる態度を西欧的意味での民主と理解する限りにおいて、チエーロ村の農民たちの態度は民主的と言うにはほど遠い。彼らが西欧的な民主主義を身に付けて個人として自立することが望ましいか否かは彼ら自身が判断することで、外国人である私がとやかく言う問題ではない。しかしそれでもなお、自分の所属する社会そして国家に対し成員としての意識を持ち、生活改善に共同して取り組みその利益を公正に享受するように努めることが、農民一人一人に強く求められているような気がしてならない。

(たかだ・ひろゆき／青年海外協力隊OB／埼玉大学大学院)